

スポーツ中継の地上波放送と有料放送における実況 の違いに関する内容分析

スポーツ文化研究領域

5009A077-9 松本 圭祐

研究指導教員：リー・トンプソン 教授

【研究目的】

スポーツ中継の地上波と有料放送の両方で同じ映像を使いながら、実況者が違う放送を比較することにより、地上波放送と有料放送で行われているスポーツ実況の違いの一端を明らかにする。

一般的に地上波放送に比べて、有料放送は、スポーツファン向けに作られていると言われている。その中で、実況者・解説者の話す言葉には、地上波放送と比べてどのような違いがあるのだろうか。

【研究の背景】

スポーツ中継の技術は日々進化してきた。映像が充実する中で、テレビの音声部分（アナウンスメント）も、研究が求められる課題であると杉山は述べている。スポーツ実況やスポーツ中継に関する記述、論述として、杉山は、視聴者によるコメンテーター（解説者）、アナウンサー、リポーターなどへの好みは、時代、内外を問わず千差万別であると述べている。そのアナウンサーと解説者への評価の評価基準に関して、永瀬は、アナウンサーに対しては「解説者とのコンビネーションの良さ」、「説明内容の適切さ」、「説明の自然さ」、「気になるような表現の少なさ」などが評価の基準になっていて、解説者の評価には「解説者としての役割の適切さ」、「声の調子の良さ」、「適切な態度」、「アナウンサーとの対応の速さ」、「感情移入の適切さ」などが評価基準になっていると述べている。森田は、スポーツ中継がもたらすナショナリズムに関して述べている。Bryant らは、視聴者の興味を高めるためにドラマが実況アナウン

サーによって戦略的に用いられていると述べ、Comiskey らは実況によって作られた興奮が、興奮に欠ける試合を誤魔化す役割を果たしていると述べている。日本人の研究者で、日本におけるスポーツ実況に関する文献として、深沢は、全国高校サッカー選手権決勝戦を例に、攻撃的なチーム、守備的なチームと対戦する両チームを描いたり、選手の高校生としての側面を前面に出したりすることによって、物語を作っていると述べている。さらに深沢は、今後の課題として、プロスポーツと比較して言説にはどのような差異があるのか、国際大会と比較してみてもどうか、放送局による違いがあるのかどうかなどを探る必要もあると提起している。日吉は、日本で行われたサッカーワールドカップの試合中継における実況アナウンスの内容分析を行い、競技プレーについて語る際には客観的な方法によって実況アナウンスがなされているしながら、選手など人物について語る際には選択的な描写がなされていることを明らかにしている。

日吉が調査対象としたサッカーの中継が、日本で行われている大会で、地上波で放送されているため、視聴者としてのターゲットがあまりサッカーに詳しくない人たちであることが考えられる。選手の容姿や過去の業績といった、あまりサッカーに詳しくない人に向けた情報に言及する回数が必然的に多くなるのではないかと私は考えた。

【研究方法】

2010FIFA ワールドカップの試合中継のうち、予選リーグの 11 試合を分析対象とし、

地上波テレビ放送と有料放送によるワールドカップの「実況中継」番組の両方を対象に、試合の模様を中継する「アナウンサー」や「解説者」、「ゲスト」など（以下、「言及者」）が、試合を担った選手や監督など（以下、「人物」）に言及した実況アナウンスを分析した。選手に対して行われた説明を、「帰属に関する言及」、「プレーに関する言及」、「知覚的説明」、「心理描写」、「言及者の意見や考え」に分類し、その分類の中でさらに細分化した。地上波と有料放送を、全体、実況、解説、勝ちチーム、負けチーム、引き分けチームとわけて比較した。

【結果と考察】

言及回数に関して、全体と勝ちチームのときに地上波に多く言及されている。説明がなされた回数ではどの場合も有意な差がなかったことを考えると、地上波、特に勝ちチームに関しては、選手名が単独で言及されている場合が多いということがわかった。

ボールを保持している選手の名前を連呼する実況や、言及回数が多い選手のフィールド上での位置を言及する実況が地上波では多く見られた。このことは、プレーに関する言及において、「体勢や存在」が地上波で多く言及されていることとも関係がある。

「大きい」、「長身」、「小柄」といった外見に関して多く言及した地上波に対して、有料放送では、「21歳」、「アルゼンチンの次代を担う選手」、「ベテラン」といった内面に関する言及が多く見られた。有料放送では画面を見るだけではわからない情報を多く言及するという構図が浮かび上がる。

有料放送では、言及されたほとんどの選手で所属に関して言及されている。試合開始直後、最初に説明を加えられるときに所属に関する説明がなされている場合が多く見られた。これは、有料放送では海外のリーグ戦を日常的に中継していることもあり、有料放送の視聴者に対して、「いつも見ているあのチームの選手です。」「みなさんにとっておなじ

みの選手です。」といったようなニュアンスがあることを表現している。

ボールの動きは全体を比較したときに有料放送に多かった。それに対して、地上波は体勢や存在の言及回数が多かった。地上波では、自チームがボールを奪って攻めあがる際に、「クリスティアーノロナウドはゴール前にいる」や、「本田圭佑は外に絞った位置」といったように、選手、特にスター選手に多くの言及が行われた。

今回の調査では、ワールドカップの実況中継のうち、人物に対してなされた実況解説だけを分析した。そのため、チームに対する言及の分析は行っていない。今後の研究課題として、チームに対する言及を分析することによって、地上波と有料放送で違った結果が見られるかも知れない。また、Barnett や森田が述べているような、スポーツ中継を通じてステレオタイプが形成されるということも見られるかも知れない。

また、言うまでもなく、スポーツ実況を決定付ける要因は人物に対する説明の内容だけでなく、声の大きさ、説のタイミング、解説者との掛け合い等もあり、今後はこれらの研究が望まれる。

【まとめ】

目に見えるものに多く言及し、人に関して多く言及しているのは地上波であり、目に見えないものに多く言及し、ボールに関して多く言及しているのが有料放送であるということが明らかになった。